広島大学附属小学校『研究紀要』第５２号　2024

基本的な技能を基盤とした音楽づくりから，音が重なるよさを見いだす音楽科授業づくり

梅比良　麻子

１　はじめに

本年度行った即興演奏と音楽づくりの実践の内，本実践は後者である。音楽づくりでは，基本的な技能を習得する題材と連動させ，安心してのびのびと表現できることをねらった。また，正解のない音楽づくりの分野だからこそ，自分で試行錯誤したり，友達の演奏を聴いたりして，それぞれが音楽のよさを見いだしていくことを目指した。

２　授業の構想

(1)題材　「『また あそぼ』のオリジナルをつくって演奏しよう」３学年

(2)題材における〈他者〉

〈他者①＝題材の他者〉

本題材では，既存の楽曲にリコーダーでもう一つのオリジナルのパートを付け加える活動を行う。元々ある旋律に対して重ねる音の選択肢はいくつもあり，同じリズムで演奏するよさもあれば異なるリズムで重ねるよさもある。子ども達はピアノ伴奏に合わせて歌ったり，２つのパートに分かれて合唱をしたりする中で重なった音を耳にしてきてはいるが，既存の曲を表現する活動では，もう一方のパートの音を聴いて相対的に合わせるよりも，もう一方のパートをできるだけ聴かないようにして，自分のパートをしっかり表現しようとする意志が働く傾向にある。それは，歌ったり楽器を演奏したりする際の技術的な難しさもあるが，本来，音を操作しながら聴くという行為自体が大変難しいものだからである。だからこそ，もう一つのパートをつくる活動の中で，あらためてどのような重なりが心地よいか，あるいは心地よくないかを試して音の重なりを丁寧に聴くことは，３学年で時間をかける価値があると考えた。本題材の〈他者＝自分の認識外のもの〉は，自分が見いだした（もしくは聞いてはいても意識してこなかった）「音が重なる響きのよさ」である。

〈他者②＝教材の他者〉

本題材で扱う楽曲『また あそぼ』は，３年生の教科書巻末「みんなで楽しく」に掲載されている楽曲の一つである。「みんなで楽しく」は，本文で扱われる題材の学習から離れて音楽活動を楽しむことに重点が置かれており，各教科と関連を図ったり，学芸会で演奏したりするなど，様々な取り上げ方をすることができる教材集として紹

介されている。そのような背景を持つ「また あそぼ」をあえて音楽づくりで用いるのは，シとラの音のみでつくられた「わらべうた」の旋律（リコーダーで演奏する）が歌の最後についているからである。これらの旋律が２音のみで構成されており，目立った音の上がり下がりがないということは，それに重ねる副次的な旋律のアイデアが出やすく，できあがった音楽もシンプルになりやすい。リコーダーの息遣い，タンギング，ミファソラシドレの運指の基本的な技能が身についた段階であえてこの楽曲を音楽づくりに用いることに教材の価値を見いだした。

また，最初に全員で楽しく歌を歌った後に続けてペアでつくった部分が表れる形で発表させることで，聴衆側も演奏に参加することになり，全員で一つの作品になっている感覚で楽しませたいと考えた。以上のことから，子ども達にとってこの楽曲は，年度当初に学んだ簡単な楽曲として一度完結していたが，自分達でもう一つのパートを付け足すことによる〈他者＝新たな楽しみ方ができる楽曲〉になると考えた。

〈他者③＝教室の友達〉

リコーダーは一度に単音しか出すことができないため,副次的な音を思いついても,重ねてみないとどうなるか分からない設定は友達の存在を必要とする。そのような必然性のある環境で音を重ね合わせる中で，互いの音を聴き，〈他者＝友達のアイデアによる新たな重なりの感覚〉を得ることを期待する。全体発表では，友達の発表から自分達にはなかったアイデアを聴き取り，よさを言語化させることによって，色々な重ね方のアイデアと感じ方を広げることをねらいたい。

(3)本題材の目標

○音の重ね方の特徴について，それらが生み出すよさや面白さと関わらせて気づくことができる。【知識及び技能】

○元々の旋律に重ねたい音の組み合わせを試し，音楽づくりの発想を得ることができる。【思考力・判断力・表現力等】

○もう一つのパートをつくる活動に進んで取り組み，友達の音に重なった音を聴こうとする。【主体的に取り組む態度】

(4)題材計画　全３時間

	題材モデル	学習内容	活動内容
第1時 第2時	〈他者＝重ね合わせ方〉に出合い，音が重なる響きのよさを見つける。 （本時　1／2）	音の重なり	元の旋律に重ねて色々な音を試し，もう一つのパートをつくる。
第3時	〈他者＝友達の演奏〉に出合い，様々な重なりのよさを見いだす。		色々な音の重なりを聴き取り，よさを見つける。

(5)本時の目標

○音を重ねるアイデアを試し，音が重なるよさを感じ取ることができる。

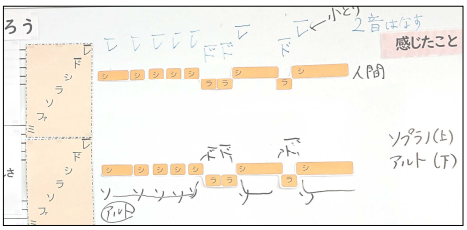
(6)提案問題

音が鳴り終わった直後に感じ方を言語化させることは，音が重なるよさを見つけることにつながっているか。

３　授業（本時）の実際

(1) 導入としての「音くじゲーム」

本活動につながる導入として，トーンチャイムによる「音くじゲーム」を開発した。４本ずつ（ドレミファ）（ソラシド）のトーンチャイムが入った２つの箱から，ペアでそれぞれ１本ずつ手にとり，同時に鳴らして偶然できた音の重なりを楽しむものである。くじの結果は，自分達の感じ方に委ねられており，音の感じを問うことは本活動の導入として効果を発揮した。前時で行った際は，３度（ミとソ，シとソ）の組み合わせが出た。子ども達は，これらの響きから玄関のチャイムを連想し，荷物が届いたことなどを想像して楽しんだ。本時の導入では，最初のペアが８度（ドと１オクターブ上のド）を出したことを受け，「ゆったり，なんかすごい，落ち着く，まざってきこえる」という発言があった。２つ目のペアが２度（ソとファ）を出すと，「神秘的，ガラスみたい，いい音，水の入ったグラスの中に鉄の玉を入れてグラスをたたいた音みたい」という発言があった。導入で，３度，８度，２度の和音感覚を共有し，２つの音がまざって聴こえたという実感を得たことを本時のキーワードとしておさえることができた。



(2)アイデアを視覚化する手立て：図形楽譜

ペアに分かれて音楽づくりを始める前に，子どもの２つのアイデアを図形楽譜に教師が書いて見せ，それぞれリコーダーで試して音の響きを聴く活動を行った。これにより，自分でつくる際にどのように記したらよいかを子ども達に示すこともねらった。

T：重ね方のアイデアはありませんか？

C：１音か２音上げてみる。レーレレレレドドレードレー（歌う）

T：（板書）一緒に先生と重ねて吹いてくれる人？（演奏）

C：お～！（拍手）

T：何に拍手したの？音はどうだった？

C：人間と小鳥が歌っているような。R さんが人間で先生が小鳥。

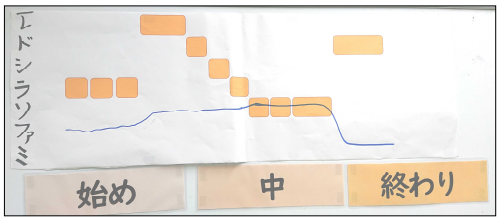
C：高すぎる音と低すぎる音。

T：「明日天気になあれ」の曲に人間と小鳥が出てきたね。

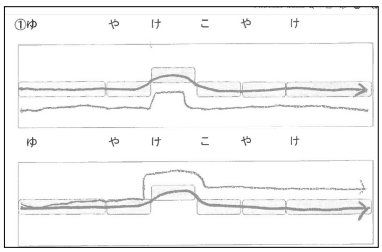
C：ちょっとずれていて，芸術的だと思った。レが高すぎて，バランスがくずれているような。

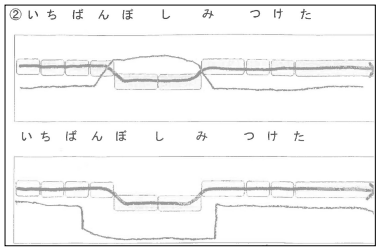
T：もうちょっと低い方がよかった？他のアイデアください。
C：ソーソソソソドドソードソー
C：先生だけで吹いてみて。音の差がやばいけぇ，つられそう。（演奏）（笑う）
T：笑って聞こえなかったんじゃない？
C：シーラシーの所がめっちゃキレイだった。
T：もう一回集中して聴いて。（演奏）（笑う）どうでしたか？
C：アルトパートとソプラノパートに分かれているような感じ。
C：先生がソプラノ。先生は低いのと高いのが混ざっていた。

子どもから出た２つ目のアイデアによって，元の旋律の下から始まり，いったん上に出て下がるという柔軟な発想を共有することができたが，アイデアの発想を広げるために用意していた既習の合唱曲の例で，同じ音になる部分があってもよいことを示した。



T：（子どものアルトパートの歌声に合わせて，図形楽譜にアルトの旋律線を書き込む）
C：（アルトは）低い。
T：ずっと低いですか？
C：ちょっとだけ高くなるけど，最後はめちゃくちゃ低くなる。
T：終わり方のことを言ってくれました。
C：ソが真ん中で鏡みたい。
T：鏡にうつした時に同じように見えるかもしれません。始めと終わりをどのようにするかは大事ですね。





この後，個人で「旋律メモ」を書かせ，書き込んだ副次的な線が谷のようになっていることを教師が言語化すると，「ため池のようになっている」等のように旋律の形を例える発言が続いた。

本時の最後は，早くできたペアの演奏をいくつか聴き，言語化されたよさを自覚させるよう促した。以下は，「一番星見つけた」につけた副次的旋律（ソソソソミミーソーミミソー）を聴いた場面である。

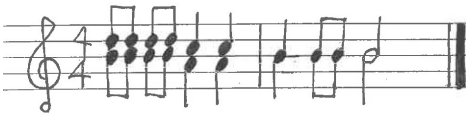
T：どうでしたか？
C：２人とも息がぴったり合ってたし、重なったところがすっきりしててよかった。
T：すっきりしたことをいいと思ったんよね。次の時にもっと聞き合いましょう。

４　子どもが見つけたよさ

本題材のまとめとしての聴き合いでは，２つの点を意識して指導した。１つ目は，

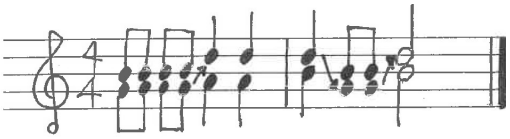
何の音と何の音の組み合わせをよいと感じたのかという具体をおさえ，和音の学習に導くことである。２つ目は，発表者がどのように考えてつくったかを発表した上で演奏し，聴く側にも何がどのようによいのかを問うことを通してよさを見いださせることである。例１～５につくった意図と教師が五線譜に書き起こした演奏の例を示す。

(例 1)「シレ，ラドで明るい音をつくって，最後を同じにしました」発表者の発言から，



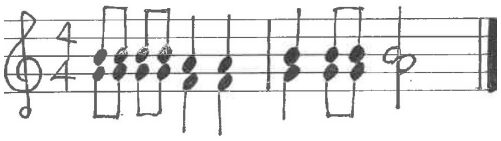
具体的な音の組み合わせを発見できたことを価値づけることができた。

(例 2)「明るいイメージなので，高い音を使ってつくりました」



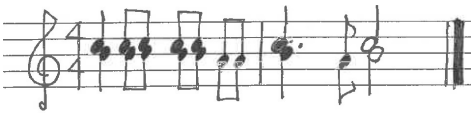
子ども達は旋律の動きの特徴を聴き取り「いきなり高くしているのがいいと思いました。」と発言した。この演奏では，急に上がることによって目立って聴こえてくる効果をおさえることができた。

(例 3)「合わせたら盛り上がるようにしました」



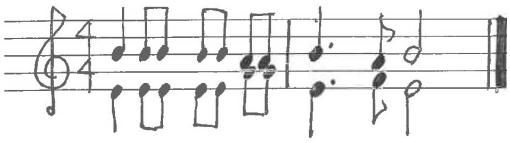
聴く前に，これまで子ども達の発言で出てきていた「きれい，おもしろい，新しい」という価値を思い起こさせ，今度は「盛り上がる」という感覚で聴くよう促した。３度の和音が多いため，聴く側は和音感を感じ取り，「お～！」という反応があった。

(例 4)「元の旋律より少し高い音にしました」



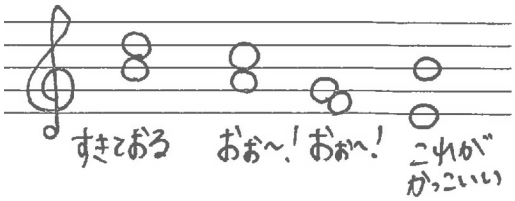
聴いた側からは,「１音だけ同じ音になったのがいい」という発言があり，１度のよさを感じ取ることができていたことを見取った。また，あるペアは，新しい音の重なりを生み出すことを目指して♯の音を運指表で確認して取り組んでいたが,「新しい音が普通の音でもできるんだと思った」と発言した。この子が言う「新しい音」とは，不協和音とされる２度の和音のことであり，友達の演奏から学ぶことができたことを価値づけることができた。

(例 5)「低い音と高い音がまざるようにつくりました」

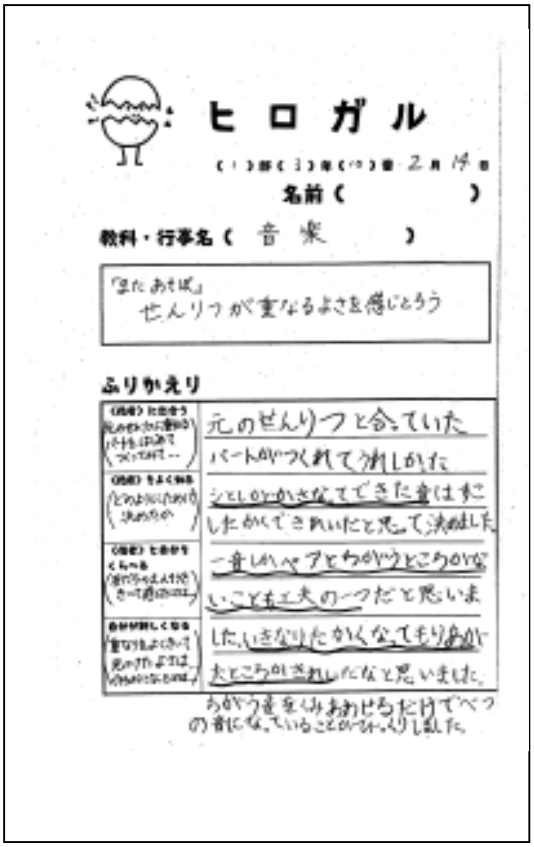


子ども達は「和風みたいですごくきれい」「すごく低くしていて想定外だった」のように発言し，全ての発表の中で最も魅力を感じていたため，何の音の組み合わせかであったかを発表者から聞き出して板書に加え，最後にいくつかの音の組み合わせをピアノの音で聴かせて再確認した。再確認した音は，３度を２つ，２度，５度であった

が，特に最後の５度の和音については「これがかっこいい」「これが一番いい」というつぶやきが多く，音の幅が広がることによる効果をよさとして見つけていることを見取った。



全体としては，子ども達が３度を多用していることから，聴きなれた和音の美しさに辿り着いたことが分かるが，不協和音とされる２度を選んだペアもあり，「新しい音」として好意的に感じ取っていたことが推察される。協和音の概念からすれば，不協和音のひずみは美しくないものとされるが，感じ方は自由であると考え，高学年で学ぶⅠ度の和音等の知識につながる題材しての位置づけとなった。



５　ヒロガルシートによる振り返り

本校の研究のまとめとして行ったヒロガルシートは，自分がどのように新しくなったかを子ども自身が自分の物語として自覚することを促す試みである。記述からは，試行錯誤で自分がつくった音楽のよさを自覚しつつ，友達の演奏からもよさを認め，感性の広がりを見取ることができた。

６　終わりに

２つの音が重なる響きを聴くことは，本題材の中でペア活動や全体発表の際に何度も繰り返され，音の重なりの感覚を言語化して価値づけることができていたことは一つの成果である。また，つくった人の言葉を通じて音楽を感じることは，感性を広げることにつながった。

また，本題材の音楽づくりは，音楽作成アプリや鍵盤ハーモニカを使って一人で行うことも可能である。それをあえて同じ音空間の中でペアで合わせようとしたり全員で聴き合ったりすることは，学校でなければできない。このような身体性を伴った音楽経験を大事にすることによって，他人と共有している音空間が自分だけでなく他人にとっても心地よいものにしていこうという願いにつながると考えている。